様式８　別紙１

博士論文の内容の要旨

専攻名　国際学研究専攻
氏　名　陳佳敏

(1)研究背景：本研究は、中島敦の植民地体験に注目し、その体験が「山月記」や「子路」「李陵」など中国の古典に取材した晩年の作品の人物造形に与えた影響とその背景に迫ったものである。

中島敦が生きていた時代は日清・日露両戦争を経て国際的な地位を高めた日本が、朝鮮や台湾など周辺諸国を植民地支配し、さらなる植民地確保のためにアジア諸国と戦争を行なっていた、いわゆる戦争の時代である。少年時代から晩年にかけて人生の三分の二を日本が支配していた、あるいは日本の一部であった朝鮮と中国・満州と南洋群島に暮らす機会に恵まれていた中島敦は、文学を志した高校生の時から植民地という異質な空間に生きる人間の存在に強い関心を示し、それらを次々と作品化していた。その作品世界は、植民地体験を概念的かつ表面的にしか捉えなかった同時代の他の植民地ものと違い、国籍や人種、民族、階級、性別、年齢、社会的地位などを問わず植民地に生きる様々な人物たちの表象を通して、「人間」とは何かを問うている。しかも、その問いは＜朝鮮もの＞から＜中国もの＞、そして＜南洋もの＞へと書き進むにつれて深まっていくのであった。

(2)研究目的：そこで本論文では、京城や大連、パラオといった植民地を舞台にした中島敦の作品を、同時代の他の＜植民地もの＞と比較考察し、中島にとって植民地はこれまで論じられてきた時代を批判する目、現実を見る目を養った場にとどまらず、人間認識の場であったという新たな事実を明らかにすることによって、植民地体験で深まった人間認識が晩年の＜中国古典もの＞に受け継がれていったことを浮き彫りにすることを目的とした。

(3) 研究内容：本論文は、序章「中島敦とその時代、そして植民地体験」、第Ⅰ部「植民地に生きる様々な群像―少年時代の朝鮮体験」、第Ⅱ部「中国憧憬と冒険を求める日本人達―青年時代の中国・満州体験」、第Ⅲ部「島民イメージを覆す南洋人―晩年の南洋体験」、そして終章「植民地体験と中国古典もの、そしてその関連性」という構成をとっている。具体的な内容は以下の通りである。

序章では、中島敦の作品の中から植民地を舞台にした作品を取り上げる意義、同時代の文壇との関係、そして彼の植民地体験に注目し、先行研究を踏まえながら論じた。

第Ⅰ部では、＜朝鮮もの＞の中から「巡査のいる風景－1923年の一つのスケッチ」（1929）と「虎狩」（1933）を分析した。これらの作品には親日派の府会議員候補や優しい日本人紳士と学生、朝鮮人娼婦、無知な日本女性、反日運動者、朝鮮人巡査、日本人学校に通う両班階級の少年など、日本人・朝鮮人を問わず植民地に暮らす実に様々な人物像が描かれている。発表当初から習作と見なされるなど、未熟さが指摘されていた中島敦の＜朝鮮もの＞は、1930年代当時多く出版された他の作家の＜朝鮮もの＞に登場するステレオタイプの人物像とは一線を画していたことを浮き彫りにした。

第Ⅱ部では、＜中国もの＞の中から「D市7月叙景（一）」（1930）と「北方行」（1933-1936）を取り上げ、中国に憧れ中国で暮らす在留日本人の様子を分析した。登場人物の多くは満鉄総裁と満鉄社員、留学生、若き知識人、富豪の未亡人など、いわゆる社会的地位の高いエリート層に属する人たちである。彼らは様々な目的と夢を抱いて中国に渡ったが、現実の中国は宣伝していた通りの世界ではなかった。当時の日本文壇でよく取り上げられていた＜中国もの＞と違い、中島敦は日本での生活を捨てて冒険に出かけたものの、夢破れた日本人たちを様々な角度と立場から探究し、彼らの存在を描き出した。その人物描写に見られる人間認識は、植民地朝鮮に暮らす人たちの様子をスケッチした＜朝鮮もの＞をさらに深めたものになっている。

第Ⅲ部では、＜南洋もの＞の中から「マリヤン」（1942）と「雞」（1942）について分析を行なった。この二作品に描かれたものは、英語と日本語が堪能なインテリ女性マリヤンと下劣で奸悪なマルクープ老人など、当時日本社会に広まっていたステレオタイプの島民イメージを覆す島民像ばかりである。第Ⅲ部では、同時代の島民イメージとは程遠い南洋人を描き出す目的と背景について分析を行なった。その結果、次の2点が指摘できた。まず、中島敦が同時代の島民イメージを覆す新しい南洋人を描き出していたことは、先行研究が指摘するような日本の植民地支配への批判にとどまらず、文明化されつつある南洋社会に暮らす島民たちが如何なる生を送ればいいか、その人間存在のあり方を問うためであったことを浮き彫りにした。もう一点は、＜南洋もの＞を通して、中島敦の人間認識が深まっていたことを指摘することができた。

終章では、晩年の中国古典に取材した作品と＜植民地もの＞を比較検討し、その類似点と相違点を指摘した。晩年の中島敦が中国古典に取材した作品を一気に描き上げることができた背後に、植民地体験によって深まった人間観察が据えられていたことを浮き彫りにした。

様式８　別紙２

論文審査結果の要旨

専攻名　国際学研究専攻
氏　名　陳佳敏

１．審査概要

（１）予備論文

2018年9月7日、陳佳敏氏の学位請求予備論文が提出され、国際学研究科所属教員5名（委員長：丁貴連教授、審査委員：磯谷玲教授・松村史紀准教授・米山正文教授・松金公正教授）による予備論文審査委員会がその審査に当たった。同委員会はまず、「宇都宮大学大学院国際学研究科における博士の学位授与に関する取り扱い要項」第5条で規定された書類が提出されたことを確認し、次に提出された論文を１ヶ月に渡って精査した。その結果、同年10月16日に開催された審査委員会において同予備論文が学位請求論文に値すると、全員一致で合意した。ただし、以下の5点については改善・補強を要求することとなった。

①植民地体験によって深まった中島敦の人間存在の在り様に対する認識の変化への説明がやや不十分である。

②植民地体験に関する個々の作品分析は丁寧かつ実証的に行われているが、その植民地体験が「山月記」など中国の古典に取材した晩年の作品の人物造形に影響を与えていたという論理の展開が表面的かつ断片的である。

③個々の作品における当時の時代状況と解釈はきちんと行われているが、中島敦自身の体験に関する分析はやや説得力に欠けている。

④第2章の「虎狩」における同時代のプロレタリア文学者の書いた＜朝鮮もの＞に登場する人物像の記述が概念的かつ概説的である。

⑤なぜ＜外地経験＞ではなく＜植民地体験＞なのか、特別な意味があるならばその概念規定を「序章」などで行うべきである。

（２）学位論文

2018年12月12日、陳佳敏氏の学位請求論文が提出されたのを受けて、予備論文審査委員5名に新たに外部委員（九州大学波潟剛教授）が加わった計6名による学位請求論文審査委員会が発足され、その審査にあたった。2019年1月11日に実施された同委員会では、まず「宇都宮大学大学院国際学研究科における博士の学位授与に関する取り扱い要項」第10条で規定された書類が提出されていることを確認し、次に予備論文審査で指摘された事項が改善されているかを検証した。その結果、いずれの点においても

指摘された事項が格段に改善・補強されていることを確認し、全員一致で最終試験を実施することを承認した。

（３）最終試験

.最終試験では、本論文について陳佳敏氏に説明を求めた後、関連事項について質疑を行なった。その結果、以下の結論に達した。

まず総評としては、これまで地域ごとの体験を中心に行われがちであった中島敦の植民地体験を少年時代の朝鮮体験から青年時代の中国・満州体験、そして晩年の南洋での体験をトータルに捉え直すことによって、中島にとって植民地は時代を批判する目、現実を見る目を養った場にとどまらず、人間認識の場であったという新しい視点を提示したことが高く評価された。特に、「人間認識」という非常に分かりにくいテーマを扱いながらも、いたずらに理論の主張や紹介、あるいは抽象的な論述に走らず、あくまでもテキスト分析に徹するという方法論をとっている点は好感が持てた。また、性質を異にする三つの空間に生きる登場人物とそれぞれの植民地との対応関係を様々なデータと資料、文献を用いて考察を行うことによって、中島文学における時代状況と文学との接点を示した意義は大きい。

次に個々の論文に関しては、第Ｉ部の第１章と第２章、第IIの第４章、第IIIの第６章が評価された。特に第Ｉ部は、習作や未定稿の故に発表当初からまともに評価されてこなかった＜朝鮮もの＞が、＜中国もの＞から＜南洋もの＞へ、さらには＜中国古典もの＞の人物造形に受け継がれていたことを浮き彫りにすることによって、植民地朝鮮こそ作家中島敦を成立せしめた原体験にほかならないという新たな視座を打ち出し、中国古典もの重視の中島研究に修正を迫ったことは本論文の成果と言えよう。第２章と第４章、第6章についても、従来の視点とは異なった立場で作品分析を行なっていることがとりわけよく分かる部分であり、新たな視点が明確化されていると評価された。

そして審査委員には、植民地支配や帝国主義的な支配へのアンチテーゼとして、コミュニズムやアナーキズムが流行り出していた当時、なぜ中島はそれらに関心を示さず古典の世界に向かったのか、果たして植民地体験は中島を古典の世界に向き合わせたのかという点をめぐる学問的関心も惹き起こされた。

ただし、本論文のキーワードとなっている中島の「人間認識」の論点に揺れが見られるなど論述が尽くされていない憾みが残る。また、朝鮮や満州、南洋での体験を論じた個別の論文や学術書には誠実に向き合っているが、同様のテーマを扱った博士論文には積極的に向き合っていないきらいが見られる。しかし、これらの指摘は本論文の学術的価値を損なうものではないことも、審査委員の間で確認された。

以上の判断により、本審査委員会は陳佳敏氏の学位請求論文が博士（国際学）の学位を授与するにふさわしいものであると、全員一致で合意した。

２．審査結果

合